

# 今やらねば

田中館愛橋の生涯

②0 【最終回】



## 【日本人の誇り】

### 西洋人と渡り合う気迫

田中館愛橋会の古い資料に、同郷岩手県出身の総理大臣、原敬の言葉がある。「総理大臣など大したものではないが、田中館博士は国の宝だ」

原と田中館は共に1856(安政3)年生まれで、盛岡の同じ藩校に学んだ。後年パリに出張した田中館を当時外交官だった原が迎え、牛鍋をつつき旧交を温めたという。

けれどもなぜ原は「田中館は国の宝」とまで言ったのだろう。

二人は共に武士の子であった。明治維新で最後まで奥羽越列藩同盟を守り戦った盛岡藩の出身者は賊軍とさげすまれた。

しかし維新が明けた日本は「西洋に



シビックセンター中庭にあるモニュメント、福田繁雄作「ローマ字の宇宙」。近づくともローマ字、遠ざかると田中館博士が現れる

百年遅れていた」ことを知り、「西洋に追いつき追い越す」、「富国強兵」を急務とした。

その時田中館は先陣を切るかのような勢いで、東京大学に学び留学し、教授となって弟子を育て、地球物理学研究の基礎を築き上げた。田中館の根底には「今やらなければ殺されると思え」という武士の覚悟があり、気迫で西洋に立ち向かった。弟子の木村栄が「Z項」を発見した時、その意味よりも「日本人が西洋列強を追い越した」ことが

『日本人の誇り』を守ったと狂喜した時代であった。

「滅私報国」という言葉通りに生きた田中館は、「(西洋に)学ぶべきは学び、(日本人として)行うべきは行う」という整然とした覚悟を守り抜いたサムライではなかったか。

日本と日本人を世界に認知させ、日本語を(日本式ローマ字で)世界に広めんと生きた田中館であった。郷里の人々は尊敬をこめて「おらほの町のおじいさん」と呼んだ。

二戸市には「田中館愛橋記念科学館」が市シビックセンターにあり、田中館の遺品や業績を紹介している。体験工房では子どもたちがさまざまな科学を学ぶ。中庭には世界的グラフィックデザインー福田繁雄が製作した田中館のモニュメントがある。また福岡五日町には、田中館が晩年を暮した「ゆかりの家」や、生家の「吞香稻荷神社」があり、神社境内にはローマ字碑、さらにすぐ近くの祖霊社墓地にはローマ字で刻まれた田中館のお墓がある。そのまま九戸城跡に抜けると田中館のローマ字碑があり、石切所大淵には郷里に

電気が通った事を祝った碑も建っている。二戸市内には今なお博士をしのぶさまざまなスポットがあり、「田中館博士を生んだ町」という誇りが漂う。

田中館の残したもので、一番大きく大切だったもの。それは「日本人の誇り」「岩手人、二戸人の誇り」ではなかったらうか。

(中村誠 田中館愛橋会事務局長)

※この内容は、デーリー東北2014(平成26)年3月24日号に掲載されたものです。

### 【ミニコラム】子どもたちへの言葉 四海兄弟

SIKAIKEITEI(四海兄弟)とローマ字で書かれた揮毫がある。1949(昭和24)年、石切所中学校の校舎落成を祝い94歳の田中館が子どもたちに書いた言葉だ。今風に言い直せば「世界中の人々はみなひとつだ」だろうか。

1951(昭和26)年に浄法寺中学校へ書いた言葉は「Komei Seidai」(公明正大)。子どもたちに話をしに各地へ出掛け、博士に憧れ科学者を目指す子も多かったという。